

然ハ暫ク居タレ、水飯食テ見セムト宣ケレバ、宣フニ隨テ候ケルニ、中納言侍ヲ召セ
 バ侍一人出來タリ、中納言例食ノ様ニシテ、水飯持來ト宣ヘバ、侍立ヌ、暫許有テ、御臺行
 參テ御前ニ居ヘツ、臺ニハ箸ノ臺許ヲ居エタリ、次ギテ侍盤ヲ捧テ持來ル、ノ侍臺ニ居ウル
 ヲ見レバ、中ノ甕ニ白キ干瓜ノ三寸許ナル、不切ズシテ十許盛タリ、亦中ノ甕ニ縮鮎ノ大キニ廣
 ラカナルヲ、尾頸許ヲ押テ卅許盛タリ、大キナル碗ヲ具シタリ、皆臺ニ取リ居エツ、亦一人大ナル
 銀ノ提ニ大キナル銀ノ匙ヲ立テ、重氣ニ持テ前ニ居タリ、而レバ中納言碗ヲ取テ、侍ニ給テ此レ
 ニ盛レト宣ヘバ、侍匙ニ飯ヲ救ツ、高ヤカニ盛上テ、高ニ水ヲ少モ入レテ奉タレバ、中納言臺ヲ
 引ヨセテ、碗ヲ持上給タルニ、然許大キナル手ニ取給ヘルニ、大キナル碗カナト見ユルニ、氣シク
 ハ非ヌ程ナルベシ、先干瓜ヲ三切許ニ食切テ、三ツ許食ツ、次ニ縮鮎ヲ二切許ニ食切テ、五ツ六ツ
 許安ラカニ食ツ、次ニ水飯ヲ引寄セテ二度許□箸廻シ給フト見ル程ニ、飯失ヌレバ、亦盛レトテ
 碗ヲ指遣リ給フ、其ノ時ニ、水飯ヲ役ト食トモ、此ノ定ニダニ食サバ、更ニ御太リ可止ムベキ
 ニ非ズト云テ、逃テ去テ後ニ人ニ語テナム咲ケル、而レバ是ノ中納言、彌ヨ太リテ、相撲人ノ様ニ
 テゾ有リケルトナム、語リ傳ヘタルトヤ、

〔玉藥〕承久二年四月十六日、此日東宮○仲始聞食魚味、○中次五獻、大夫教家卿勸益相國、瓶子殿上

五位、次居水飯、不待居畢食之、

〔明月記〕嘉祿二年六月十日、予○藤原歸庵不食、無力之身入興忘窮屈、歸來之後、前後不覺、只水飯食
 之、辛苦、雞鳴也付寢、

水漬

〔古今著聞集十五〕宿執孝道朝臣わかかりける時、さして其病と云事なきに、なやみて日數を送りける、
 次第に大事に成て、飲食も不通して、存命あぶなく見へければ、妙音院殿師○藤原大におどろかせ
 給て、かの病席におはしまして、所勞のやうくはしく御尋有ければ、孝道たすけをこされて申け